平成10年度

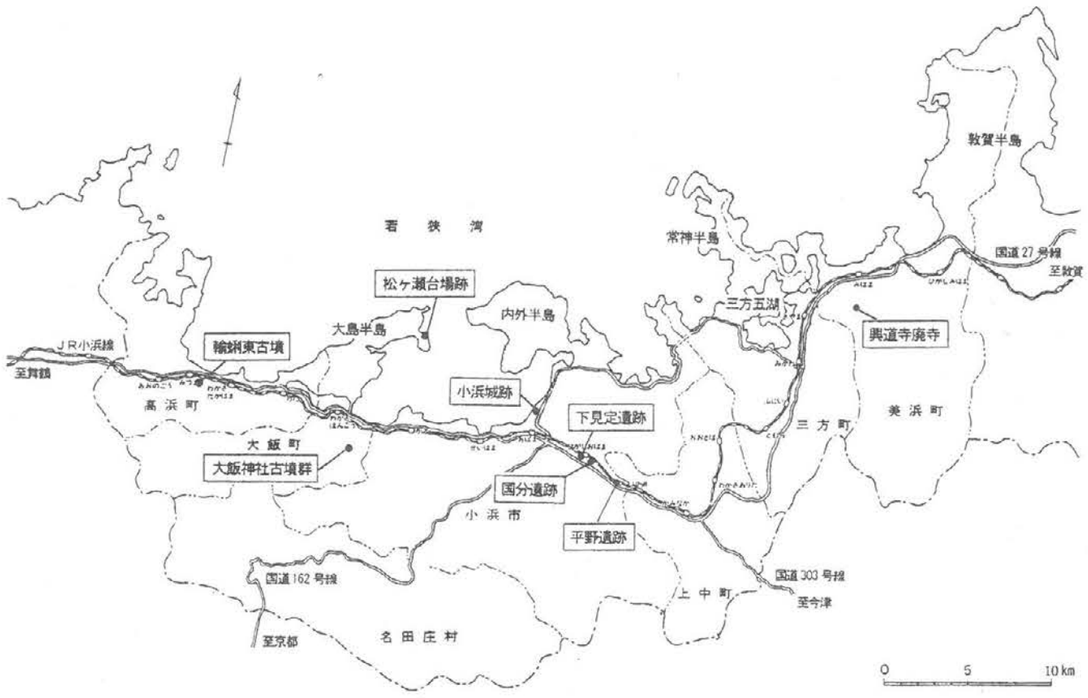
若狭地方における発掘調査の成果

平成11年3月14日（日）

福井県立若狭歴史民俗資料館

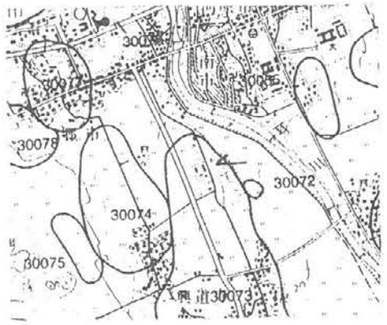
平成10年度の主な調査遺跡

遺跡名	所在地	調査主体	時代
・興道寺廃寺	美浜町興道寺	美浜町教育委員会	古墳時代
・平野遺跡	小浜市新平野	小浜市教育委員会	弥生時代
・国分遺跡	小浜市国分	小浜市教育委員会	古墳・平安時代
・下見定遺跡	小浜市遠敷	小浜市教育委員会	平安時代
・小浜城跡	小浜市城内	小浜市教育委員会	江戸時代
・松ヶ瀬台場跡	大飯町大島	大飯町教育委員会	江戸時代
・大飯神社古墳群	大飯町山田	県埋文センター	古墳時代
・輸蝋東古墳	高浜町東三松	高浜町教育委員会	古墳時代



遺跡位置図

遺　跡　名	興道廃寺（興道寺遺跡）
所　在　地	三方郡美浜町興道寺観音・土井ノ上他
調査原因	史跡範囲確認
調査期間	平成10年８月20日～同９月３日
調査主体	美浜町教育委員会
調査担当者	松葉　竜司
遺跡面積	約７７㎡
時　　代	古墳時代後期（平安時代を含む）



調査の概要

本遺跡は美浜町中央部を南北に流れる耳川の左岸、河岸段丘上に立地する。現況は茶畑である。「観音」といった寺院址を想定させる小字がみられること、過去に古瓦の採集、出土があったことから古くより寺院址の存在が推定されている。農道敷設にともなう路線選定に先立ち、かつ、将来的な本遺跡の調査、整備を睨み、範囲確認を目的とした試掘調査を実施した。計６本のトレンチ調査を行っている。

調査の結果

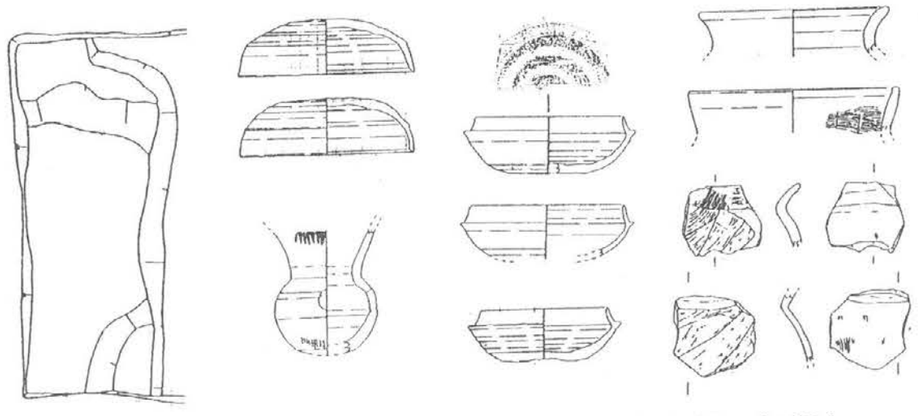
４トレンチより古墳時代後期の溝状遺構２基と土壙２基、平安時代の土壙１基、時期不明の性格不明遺構１基が、５トレンチより古墳時代後期の溝状遺構１基が確認されている。１～３トレンチ、６トレンチからは遺構は確認されなかった。

これらの遺構に伴って、須恵器、土師器、製塩土器が出土している。

５トレンチ、溝状遺構出土の遺物について、須恵器は坏蓋、坏、甕、瓦、高坏が64点、土師器は甕、椀が64点、製塩土器が細片で10点弱出土している。これらの出土資料は須恵器、製塩土器の年代観より６世紀初頭から前半の時期に位置付けられる。

今回の調査により、興道廃寺に属する寺院施設は確認されなかったが、興道寺遺跡に包括される集落遺構が確認され、６世紀に属する集落遺構は本町においては初見である。

本調査の結果を含み、また、試掘調査に平行して実施した調査区周辺における遺物分布調査、地形環境調査により、興道廃寺については現況茶畑の北１／３に中心が求められ、かつ寺院址付属遺構について土砂の削平などにより残存度は高くないと思われる。



５トレンチ・溝状遺構１　遺構図（Ｓ＝１／60）・遺物図（Ｓ＝１／６）

遺　跡　名	平野遺跡
所　在　地	小浜市平野２０号４－５他
調査原因	遺跡確認調査
調査期間	平成10年10月19日～12月18日
調査主体	小浜市教育委員会
調査担当者	松川雅弘
調査面積	528㎡
時　　代	弥生時代（第Ｖ－２様式）

調査の概要

〈遺跡の環境〉

平野遺跡（07158 福井県遺跡地図番号）は小浜平野の南端を走る熊川断層崖にできた扇状地上に位置し、周辺には・白鬚神社古墳（07159）・平野古墳群（07157）が、さらに上中町内には国指定の上・下船塚古墳を含む舟塚遺跡が近接する。

〈調査内容〉

今回の調査はトレンチ（別添図参照）を東西方向に2本と、南北方向に2本設定し調査した。規模下記のとおりである。

第1・2トレンチ　幅8ｍ×延長30ｍ　　第4トレンチ　幅3ｍ×延長3ｍ

第3トレンチ　　幅3ｍ×延長13ｍ

平均的な調査深度は旧地表から－1.5ｍ程度であるが、第1・2トレンチについてはその上に客土が4ｍ強の厚さで存在するため、トレンチの最深部は現地表から－5.5ｍ以上にまでなることとなった。

層序は第1トレンチにおいて、最大9層確認されている。遺物包含層は別紙に掲載した第1・3トレンチのみに存在する。双方とも、第7層の暗灰色混礫土層が遺物包含層であり、厚さ10㎝前後の堆積をしている。この層からは土器だけでなく、竹根・竹葉等の植物遺体も多量に確認されている。竹は地下茎で強く結びついており、簡単には流されたりはしないのが普通である。それが多量に含まれていること、さらにそれが空気から遮断されて腐食していないことを考えると、出水等によって竹林が破壊されこの地点に運ばれて堆積したたものと考えられる。

遺物は甕の口縁部と底部を主体とし、高杯、長頸壷、無頸壷等が確認されている。遺物の特徴は甕の口縁部に限定すると丹後地方の土器の影響を受けており、長頸壷・無頸壷に限定すると大阪湾周辺の土器の影響を受けていることが確認されている。遺物はその割れ口の鋭いものが多量にあり、長い距離の移動は考えられない。

〈調査結果〉

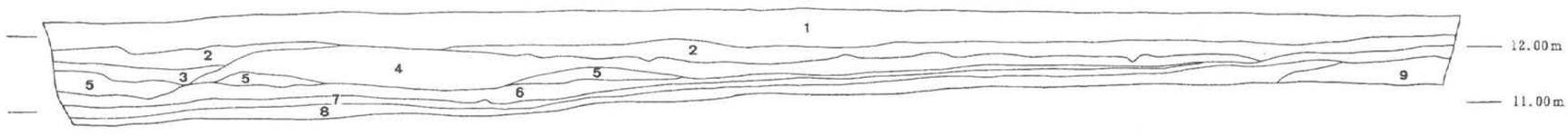
調査の結果、今回の調査地区は遺物等が短期間に大きな力で、さらに早い速度で堆積した地点であることが確認された。それは平野遺跡内のより高い位置で周囲に竹林を持つ集落を、出水等が瞬時に破壊してこの位置にまで土器片を運んだと考えられる。そのため、遺物が確認されているのに、どこのトレンチからも遺構は確認されていない。

平野遺跡

調査区域

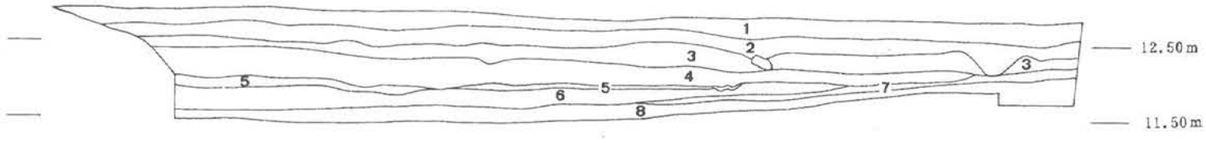
遺跡範囲

平野遺跡トレンチ層序図



第1トレンチ

1．灰茶色土層（旧耕作土）
2．暗茶色土層
3．暗灰色砂礫層
4．灰色粘質土層
5．暗灰色砂層
6．暗灰色土層
7．暗灰色混礫土層（遺物包含層）
8．緑黄色混礫土層
9．緑灰色混礫土層（2.0cmくらいの緑色礫）

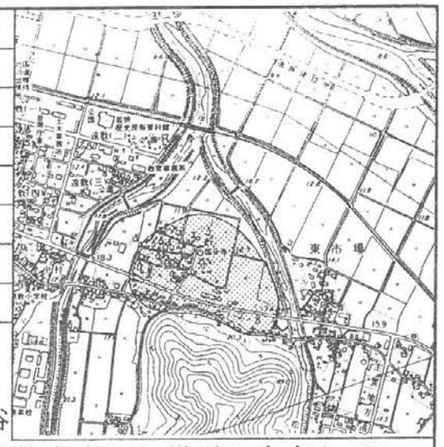


第3トレンチ

1．淡茶色土層（耕作土）
2．淡茶色粘質土層（床土）
3．暗茶色土層
4．灰色粘質土層
5．暗灰色砂層（0.5～2.0mmの砂）
6．茶灰色粘質土層
7．暗灰色混礫土層（遺物包含層）
8．濃緑灰色混礫土層

縮尺　1／80

遺　跡　名	国分遺跡
所　在　地	小浜市国分８３号１４－１他
調査原因	遺跡確認調査
調査期間	平成10年5月25日～ 5月29日
調査主体	小浜市教育委員会
調査担当者	下仲隆浩、松川雅弘
調査面積	33㎡
時　代	平安時代、古墳時代中期



調査の概要

〈遺跡の環境〉

国分遺跡(07134 福井県遺跡地図)は遠敷谷と松永谷に挟まれた尾根の北に位置し、比較的安定した場所に存在している。遺跡内には国分寺古墳(07136)・国分古墳(07135)・若狭国分寺跡(史35)が存在し、周辺には馬場遺跡(07130)・下松塚遺跡(07131)・上松塚遺跡(07132)・松塚古墳群(07133)・マンダイ山古墳群(07137)さらに松永川を挟んで東には西縄手下遺跡(07147)が近接する。

国分地区はその名のとおり国分寺が存在し、奈良時代においては政事と宗教の重要な場所でもあった。さらに小浜市内で屈指の規模を持つ円墳と、その存在が明確には確認されていないが市内で唯一鏡を持っていた前方後円墳を遺跡内に持っていることから、この地区は古代において非常に重要な地区であったことが推察される。

〈調査内容〉

今回の調査では、トレンチを東西方向に1本設定した。規模は幅3m×延長10mとなった。平均的な調査深度は旧地表から－1.0m程度である。検出された遺構面の一部が、撹乱によってすでに破壊されていることも確認された。層序は4層検出され、第3層が律令期の遺物包含層であると確認されている。遺物は10世紀で次のようなものが確認されている。

須恵器(杯蓋、鉢・糸切り底)

土師器(椀底部・糸切り底)

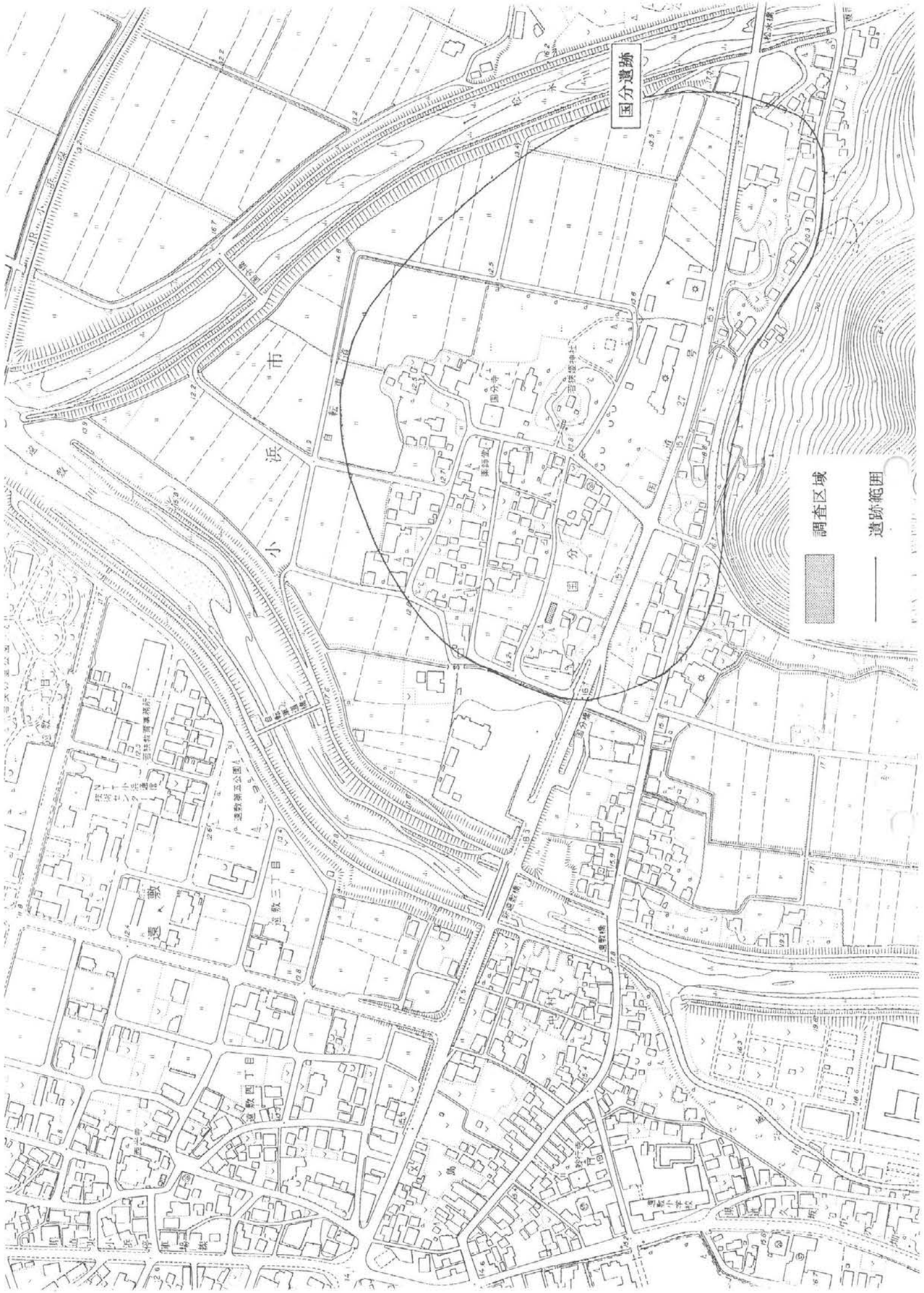
緑釉陶器(高台部・山城産、口縁部・近江産)

遺構面は第4層上面に存在し、柱穴が2個とピットが5個確認されている。状況からみてこの面が10世紀の遺構面であると思われるが、柱穴やピットからの遺物確認はされていない。

この他に暗茶色を呈している第4層からは、円筒埴輪片(タガ部、円形穿孔部)が確認されている。復元できるほどの量ではないが、円筒埴輪の部位や調整痕は確認できる。この一連の埴輪片は、画文帯仏獣鏡を埋納していた国分古墳のものと考えられる。

〈調査結果〉

調査の結果、国分遺跡は10世紀の遺構面を持ち、さらにその下には国分古墳とそれに付属する遺構や遺物が存在することが確認された。



遺　跡　名	下見定遺跡
所　在　地	小浜市遠敷８３号１４－１他
調査原因	遺跡確認調査
調査期間	平成10年6月2日～ 8月3日
調査主体	小浜市教育委員会
調査担当者	下仲隆浩、松川雅弘
調査面積	451㎡
時　　代	平安時代

調査の概要

〈遺跡の環境〉

下見定遺跡(07115 福井県遺跡地図)は遠敷谷の出口に位置し、遠敷川が造り出した緩やかな扇状地上に存在する。周辺には西牟久遺跡(07116 同上)・壱町田遺跡(07113 同上)が近接する。遠敷地区は古代より若狭地区の政治的経済的中心地とされているが、往時より間断無く開発が行われており、主要な遺跡は現市街地の地下に存在するものと思われる。そのため発掘調査が困難となっており、現時点においてもこの地区が上記のような要衝であるとは、考古学的に立証はされていない。今回の調査はその一端が確認できる可能性を持っている。

〈調査内容〉

今回の調査では、トレンチ(別添図参照)を東西方向に5本設定した。規模は下記のとおりである。

第1トレンチ 幅4m×延長30m　　第4トレンチ 不定形四角形 面積63㎡
第2トレンチ 幅4m×延長29m　　第5トレンチ 幅4m×延長16m
第3トレンチ 幅4m×延長27m、

平均的な調査深度は旧地表から－1.5m程度であるが、第1･2･3･4トレンチについては、その上に客土が1m強の厚さで存在するため、トレンチの最深部は現地表から－3.0m以上にまでなることとなった。

層序は第1･2･4トレンチで5層、第3トレンチで8層、第5トレンチでは4層確認されているが、遺物包含層は第2･3･5トレンチでしか確認されていない。遺物は次のものが確認されている。

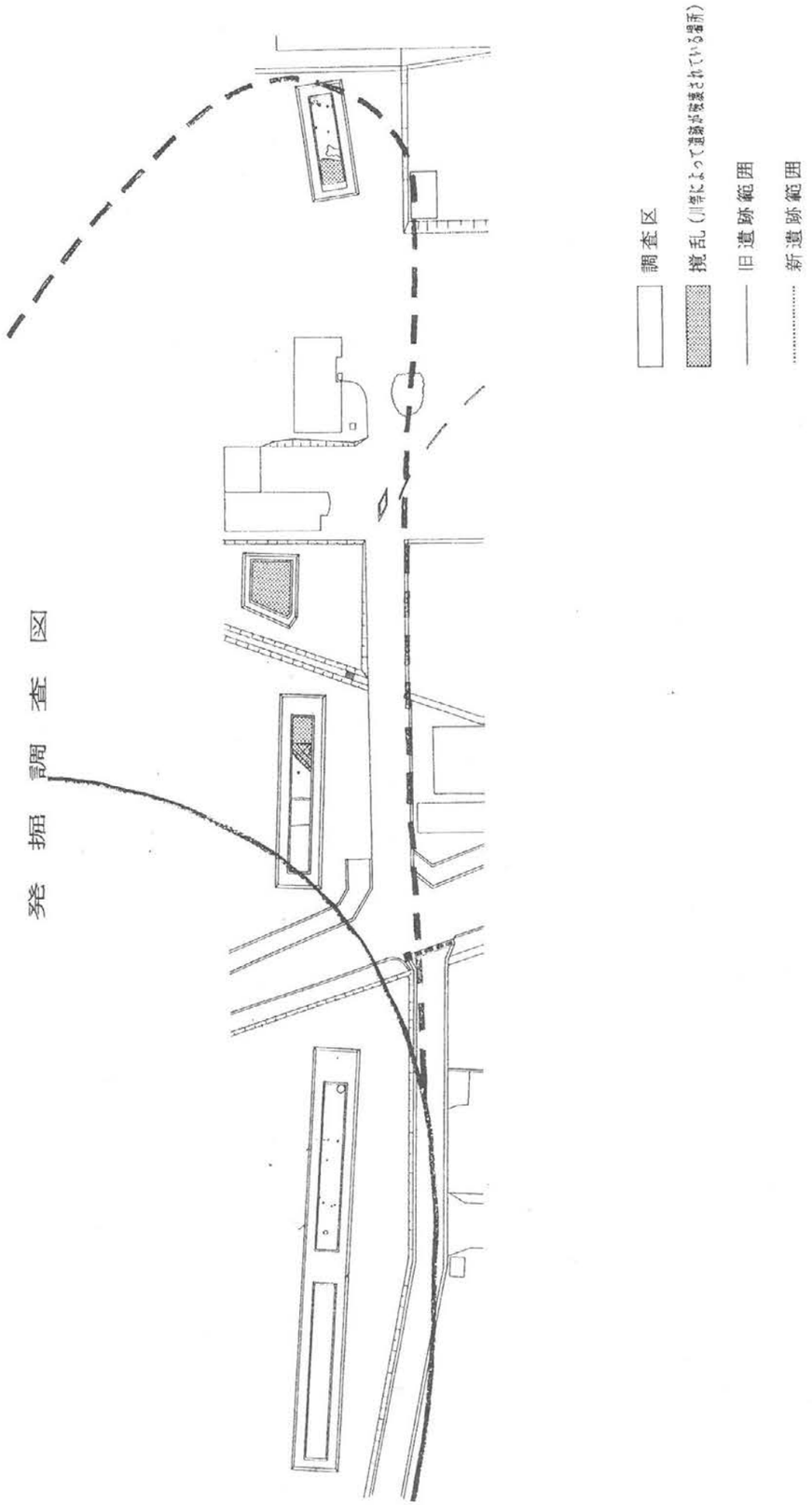
土師器(椀底部)、黒色土器(椀底部)、緑釉陶器(高台部･口縁部)
白磁(椀底部･口縁部)

年代的には10～１２世紀の遺物である。遺物量は過去の調査例と比較すると、極端に少ないことがあげられる。また遺構に関連する遺物もほとんどなく、遺物から下見定遺跡すべてを言及することは早計なようである。

遺構は第2･3･5トレンチで確認されており、特に第5トレンチでは別紙のような建物遺構が確認された。また、第3･5トレンチの一部が河川によって遺跡が破壊されていることも確認された。

〈調査結果〉

調査の結果、下見定遺跡はその範囲が東側に広がることと、河川の影響を受けている遺跡の構造が確認された。



小浜城跡

所在地	小浜市城内１、２丁目
調査原因	小浜市公共下水道管渠布設工事
調査期間	平成10年11月11日～平成11年3月1日
調査主体	小浜市教育委員会
調査担当	下仲隆浩・松川雅弘
時代	江戸時代

《調査の概要》

小浜城は若狭国の近世城郭として、慶長6年（1601）京極高次により築城が開始され、寛永11年（1634）の酒井忠勝入部後の天守閣、各櫓等の普請などにより完成を見た平城である。総構規模は、18,937坪（62,492㎡）で、近世城郭としてはさほど大きなものではないが、南北両河川と小浜湾を利用した「水城」であり、屈折を巧に配した見事な縄張りといえる。

現在の小浜城跡は、県史跡となっている天守台を含む本丸石垣の2／3を残すのみで、往時の姿は留めていない。しかしながら、昭和54～57年の多田川改修工事などに先だって実施された調査や、平成9年度行われた調査では、上部遺構は殆ど削平を受けているものの、石垣基底部及び若干の遺構は残存していることが確認されている。

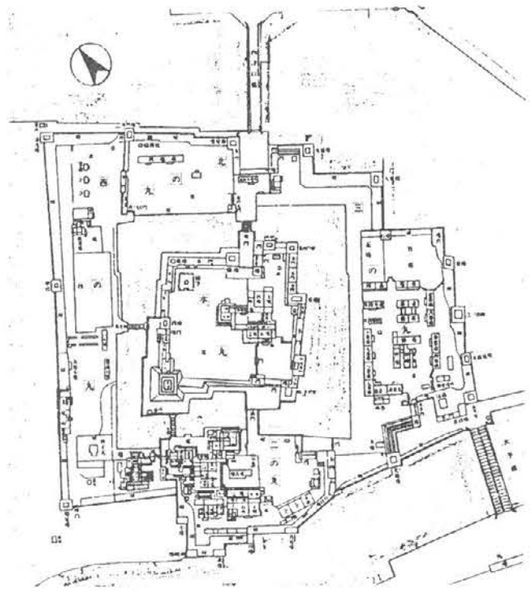


図１　小浜城縄張図

今回は旧二の丸部分の調査で、前年度同様に下水道管渠布設部分を幅1.5mのトレンチ調査で対応した。また、城絵図などの史料も積極的に活用し、遺構の深査を行った。

《調査結果》

調査の結果、二の丸の建物群と大手筋とを区切る塀の礎石と思われるものと、それに付帯する溝（調査区①、図３）、二の丸内堀石垣跡（調査区②）、二の丸客殿の一部（調査区③）を検出している。

調査区①で検出された塀礎石（図３、礎石②）と考えられるものは、一辺35㎝前後の上面が扁平な石で、その周囲には玉石が散乱する。この礎石の大手側（東側）には瓦が散乱しており、おそらく塀は東側に倒されて廃棄されたものと思われる。絵図によると、この

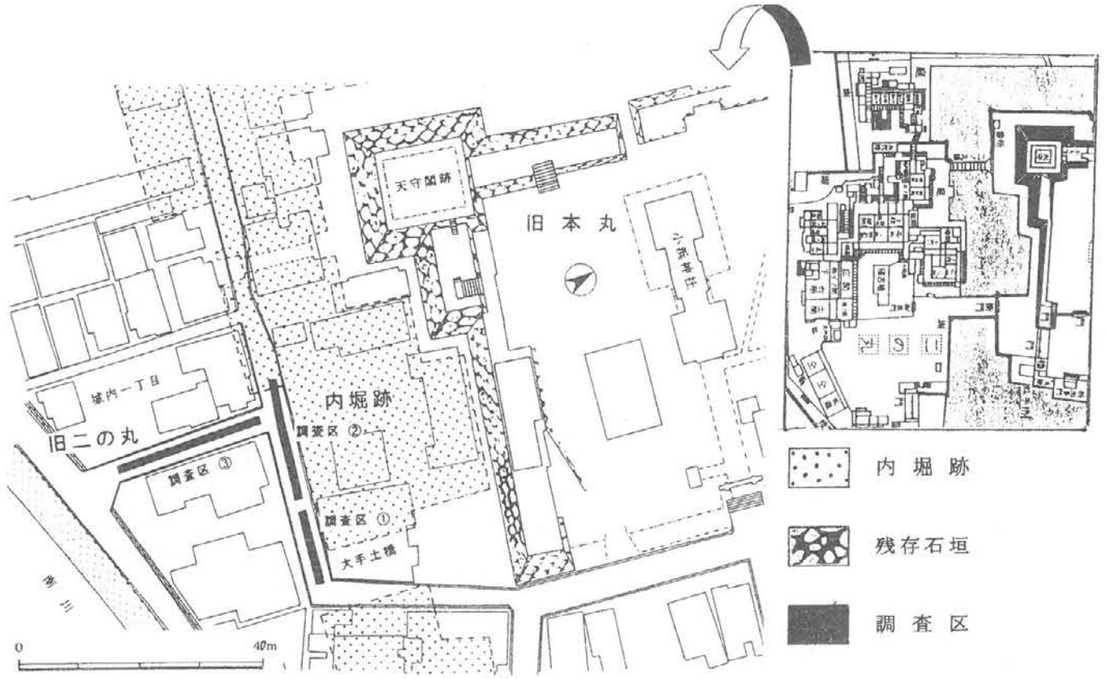


図2　調査区位置図

塀は本丸衝門から土橋の西端を経て調査区１に直行するものである。昨年度の土橋東側石垣の調査結果と総合すると、大手土橋の幅は上巾で約８ｍとなる。塀遺構の二の丸側（西側）には、これに付帯する溝遺構がある。二の丸客殿が存在する西側のみに石列を配し、底部は10㎝程度厚の赤土整地を行っている。二の丸の雨水を内堀に排水する施設と考えたい。溝の西では建物礎石（図３、礎石①）を検出している。二の丸客殿東端の礎石と考えられ、建物外側と考えられる位置に玉石を敷き詰めている。おそらく、建物雨落ちの排水を意識したものであろう。

調査区②では、客殿の礎石は確認されていない。しかし、大型の飾瓦と扁平な石を併用して礎石とした可能性のある遺構が一部検出されている。また、建物軒下と考えられる位置で若干の玉石敷も確認している。さらに調査区西端では、内堀に落ちこむ土層の堆積をトレンチ断面で確認している。石垣は廃城時に破壊されたものと思われ、内堀内と考えられる位置で廃棄された石垣石材を若干検出している。

調査区③では、建物礎石を１つと、礎石抜取り穴３か所を検出している。これらは、調査区西端に添って約４ｍ間隔で南北に縦断している。二の丸客殿の西端礎石群と考えたいが、調査区が狭いため断定が難しい。今後行われる周辺地域の調査を総合して判断したい。また、この調査区の北端と南端で、半地下埋め込みの土管を検出している。管１本の長さは60㎝以上、片方の径が小さくなる差し込み式の円管である。差し込み接合の部分は、石灰状の物質で丁寧に間詰めされている。製作技法、焼成方法ともに丸瓦のそれと同様のもので、瓦製土管といえる。建物内への導水に使われたものと考えたい。

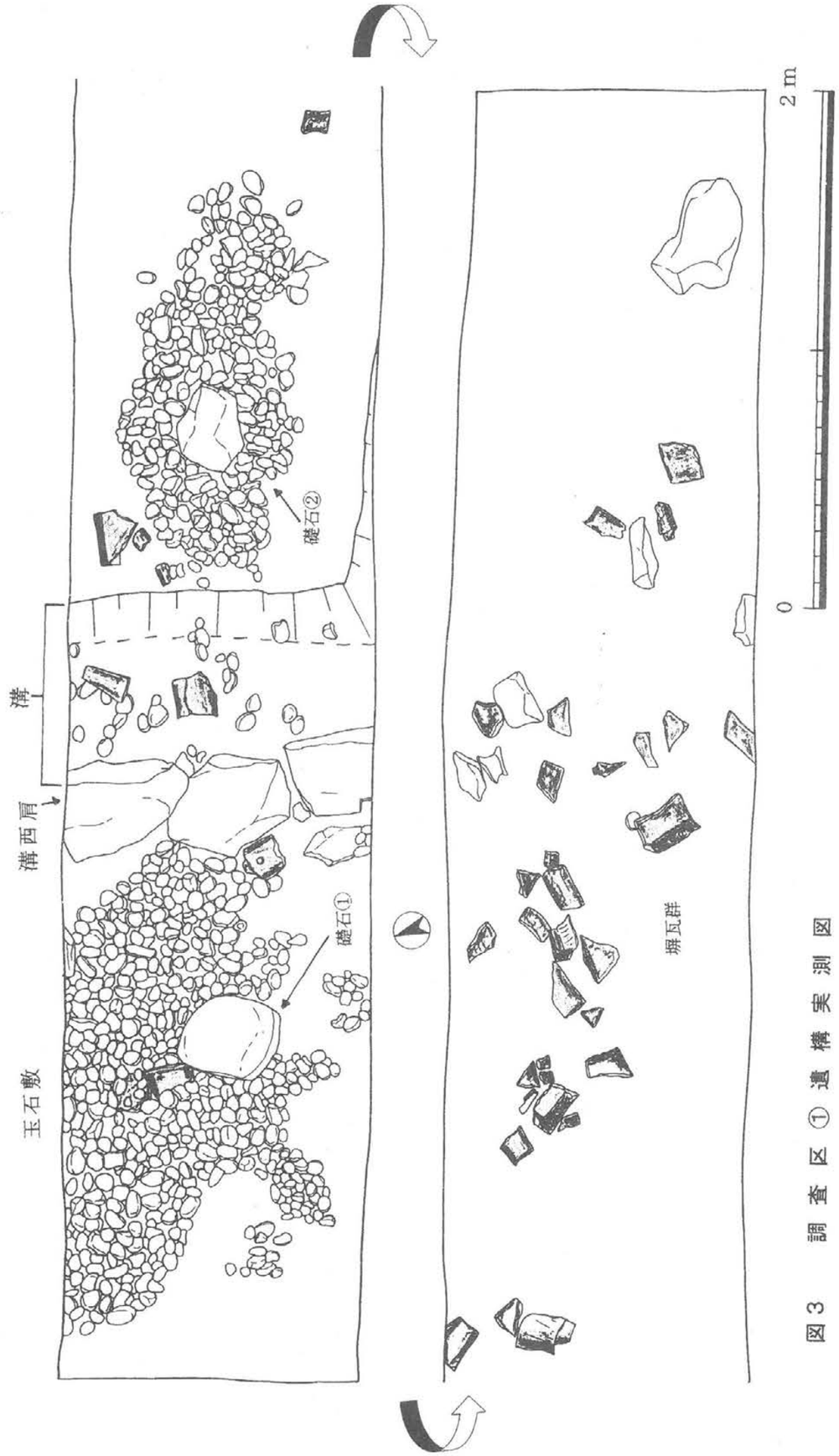


図３　調査区①遺構実測図

遺　跡　名	小浜藩松ケ瀬台場跡
所　在　地	大飯町大島赤礁
調査原因	遺跡の内容と範囲の確認
調査期間	平成10年６月１日～平成11年３月３１日
調査主体	大飯町教育委員会
調査担当者	田中栄一
調査面積	調査対象面積　約１，０００㎡（内発掘調査面積　１９０㎡）
時　　代	近世末

＜遺跡の位置＞大飯町は福井県西端の大飯郡東部にあり、その北東部には小浜湾北西部を形成する大島半島が位置している。大島半島先端には、近世末に築造された小浜藩（松ケ瀬・鋸崎）台場跡が良好な形で現存している。

＜調査の目的＞１８世紀後半、ロシア船からの脅威に対し、皇都（京都）の北方防備のため、若狭湾沿岸に築造した小浜藩台場跡の中で、保存状況良好な松ケ瀬台場跡（第３図）の内容等を把握するのが調査の目的である。

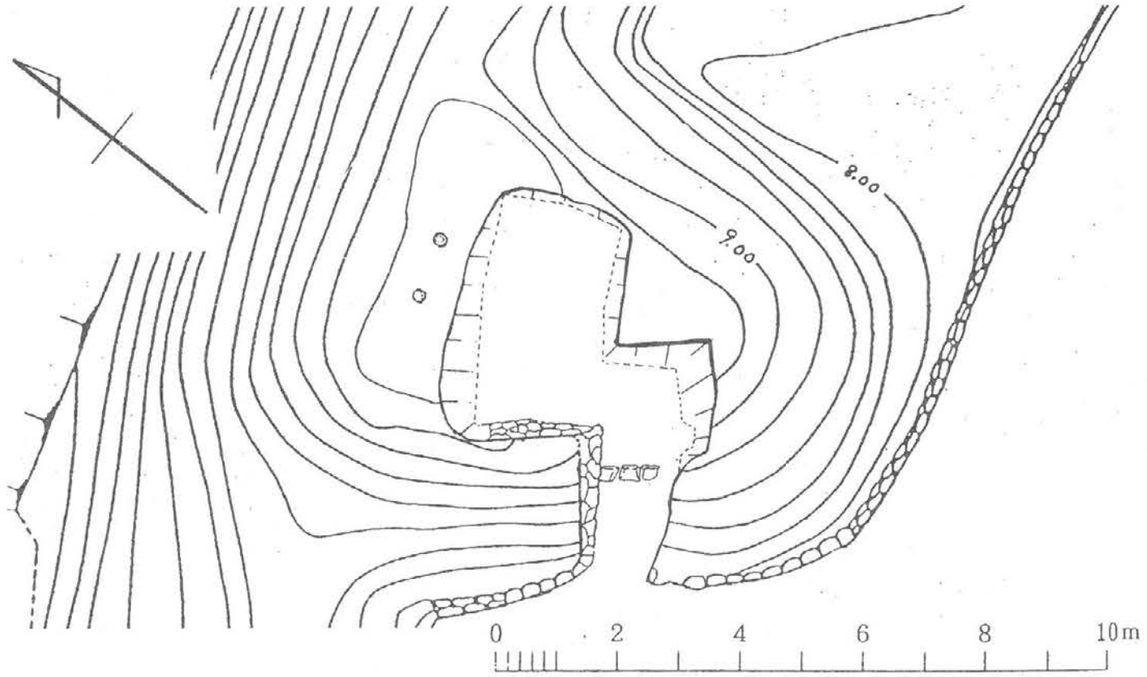
＜遺構の内容等＞松ケ瀬台場跡は平成６年度に２号台場跡、翌年度には１号台場跡の発掘調査を実施した。

①２号台場跡は半円形をした土塁に囲まれ、海面より約７ｍ高で小浜湾に面している。遺構の直径は約８０ｍ、土塁の幅約１４ｍ、高さ約２．２～２．４ｍである。土塁の内側には、中央部分に半円形の砲座が１基、それを挟む形で左右対象に方形状（約４．０ｍ×５．０ｍ）の砲座がそれぞれ２基ずつ配置されている。方形状砲座は、土塁上に築かれた砲眼と一体を成し、砲眼は海側に開口している。砲座の周囲は、土塁に沿う形で一段低い平場となり、腰まき状の高さ約９０ｃｍの石積みにより保護されている。さらにその後方は半円形の広範囲な平場部分となっている。土塁両端は一段高い丘状となり、中央部分は陥没している。今年度は、特にこの陥没部分並びに半円形砲座の中心部分について調査を実施した。

(1) 平成６年度に一部調査した陥没部分について、今年度詳細に調査したところ内部の構造は出入り口部分と奥室部分の２室構造になっている（第１図）。出入り口部分の出入り口幅は約９０ｃｍ，奥行き約３．２ｍ、左壁は高さ約１ｍ・幅約２．３ｍの石積み上に高さ約４０～５０ｃｍの土壁となり、右壁は数１０ｃｍ角の石積みが２段２列出入り口に配置されている。その上に高さ約４０～９０ｃｍ、幅約３．２ｍの土壁により構築されている。出入り口部分から約１．２ｍ入った床上には、約３０ｃｍ角の石が３個横に並んでいる（第１図）。出入り口側に面した奥室の壁は、出入り口部分左壁に続く高さ約１ｍ・幅約１．８ｍの石積み上に高さ約１ｍの粗い叩き上げ状の土壁となっている。奥室左壁は幅約３．８ｍ、高さ約２．６ｍで数ｃｍ大の丸石が黄褐色・明褐色土等に混ざり、念入りに叩き上げられた層を形成している。この左壁中央部分から約１ｍ先に直径約２０ｃｍ、深さ約９０ｃｍの通気口らしき穴を確認した。穴の中から、遺物等は検出されなかった。奥壁の幅は、約２．０ｍ、高さ約２．７ｍであり、右壁はそれぞれ約２．２ｍ、約２．１ｍである。奥壁・右壁の層位は、左壁同様の叩き構造となっている。床は、数ｃｍ大の丸石混じりの礫土状となっている。鋸崎１番台場跡（平成8・9年度調査実施）の背後に位置している焼紅弾室（酒井家編年史料稿本・鋸崎図面）跡と同じ施設跡ではないかと思われる。

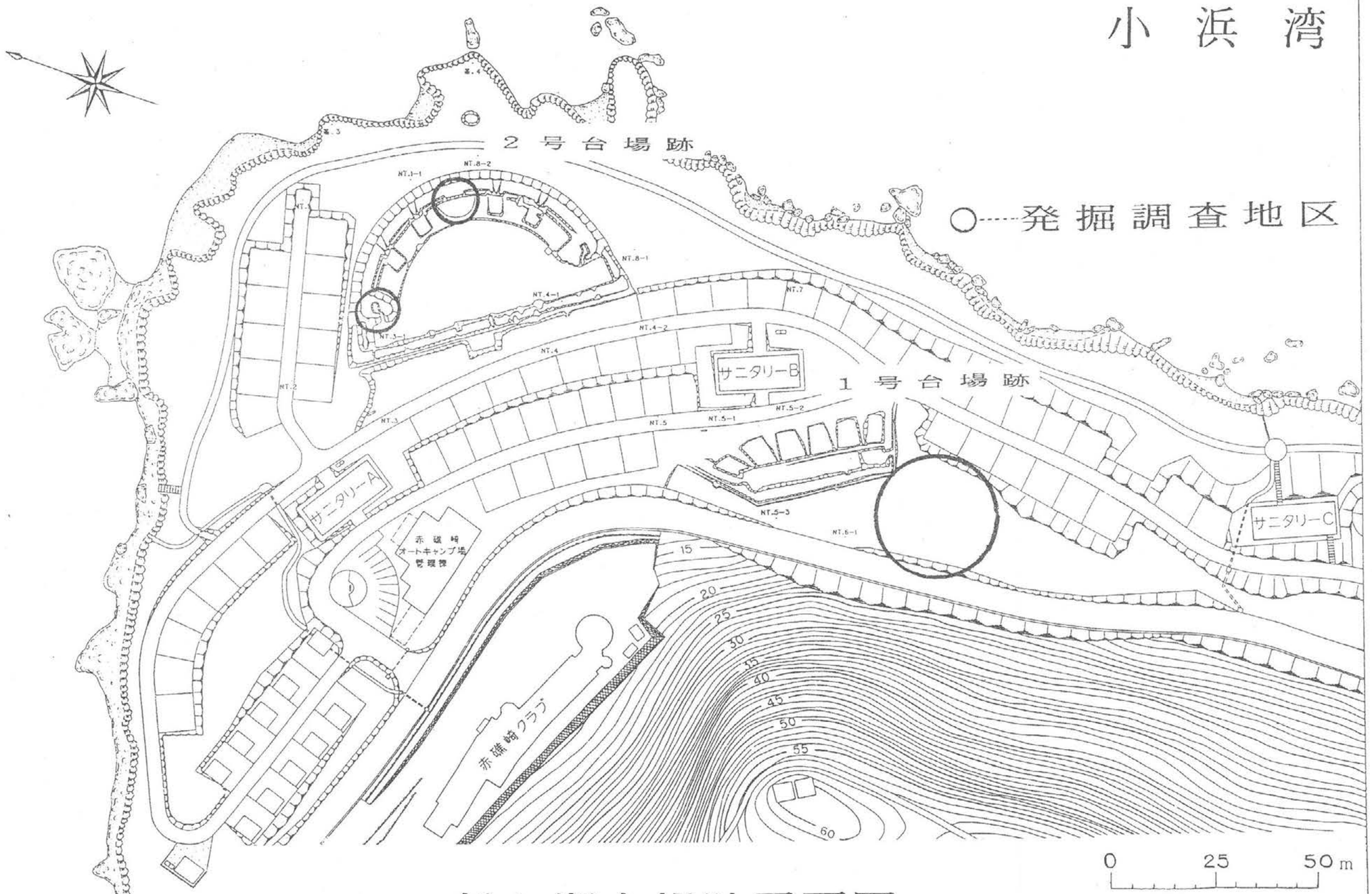
(2) 土塁の内側中央部分の半円形砲座については、主に中心軸を確認するのが調査の目的である。半円形砲座の中心部分周辺を約６０ｃｍ掘り下げていったところ、直径約３５ｃｍ、深さ約１４ｃｍの穴（第２図Ａ）を検出した。この穴は、幅約９０ｃｍ，長さ約８ｍの範囲内にほぼ同レベル的に敷かれた平石列（第２図Ｂ）の中央付近から約３．３ｍの場所にある。これは、平石列（第２図Ｂ）上に敷設されたであろうレール上を移動するのに必要な半回転式大砲の軸穴ではないかと推測される。尚、平石列から土塁トップまでの高さは約１．２ｍであり、土塁上には砲眼は築かれていない。背後に広がる半円形平場から平石列までの高さは、約９０ｃｍである。

②１号台場跡の周囲を取り巻く溝の南後方緩斜面である原野部分について調査を実施した。主に番所等の附属施設の確認作業が中心である。南北に幅２ｍ，長さ１０ｍのトレンチを４か所、これに交差する形で中央部分にもトレンチを入れ、調査範囲を広げていった。中央の平場部分中心に約８０ｃｍ掘り下げたところ、１０ｃｍ角の自然石が混じった黄褐色土層（地山）に到達した。このことから、１号台場跡南側後背地には建物等の附属施設が所在しなかったことを確認した。



第１図（松ケ瀬2号台場跡）北側焼紅弾室跡平面図

第２図（松ケ瀬2号台場跡）半円形砲座平面図



第3図 松ケ瀬台場跡平面図

大飯神社古墳群

所 在 地　福井県大飯郡大飯町山田
調査原因　近畿自動車道敦賀線建設事業
調査期間　平成１０年６月８日～現在
調査主体　福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
調査担当　赤澤徳明・御嶽貞義・鯵本眞友美
時　　代　古墳時代 後期

調査の概要

大飯町の中心を東西に流れる佐分利川流域には、古墳時代後期の群集墳が数多く存在する。大飯神社古墳群もそのうちの一つで、大飯町東部の佐分利川右岸、山田集落と芝崎集落とに挟まれた尾根の先端頂上部から山麓にかけて展開している。東南東から西北西にのびるその尾根の西北西側山麓には大飯神社がある。

現在、大飯神社古墳群では約30基の古墳が確認されているが、そのうちの７基が近畿自動車道敦賀線の本線工事範囲にかかる。１基は標高約86mの丘陵上に、他は南側斜面に立地する。調査に際しては、丘陵上の１基を１号墳、斜面の６基を東から順に２号～７号墳と仮称した。調査中に新たに確認された竪穴式小石室５基については、検出順に１号～５号まで番号を付けた。

４・６・７号墳および１～４号竪穴式小石室は昨年10月末までに調査が終了し、１・２号墳および５号竪穴式小石室については現在調査中である。また、３号墳・５号墳については、石室が調査対象区域外にあり古墳の詳細は不明である。

第1図　大飯神社古墳群周辺地形図

調査の結果（中間報告 99.3.14現在）

１号墳

〈墳　　丘〉　円墳　　直径：約14m
〈埋葬施設〉　片袖式横穴式石室（右片袖）　　開口方向：西　　全長：約7.40m
玄　室　　長：約3.3m
幅：奥壁側で約1.85m、玄門側で約1.5m
高：奥壁側で推定約1.9m
床：玉砂利敷き
羨　道　　長：約2.1m　幅：0.8～0.9m
前庭部　　長：約2.0m
〈玄室内副葬品〉
土 器 類　須恵器：坏蓋８、坏身９、長脚付有蓋長頸壷１、甕１、提瓶３
鉄 製 品　大刀２、短刀２、鉄鏃８、鉄鎌１、刀子８
装身具類　勾玉７、管玉20、切子玉12、小玉38
〈築造時期〉　６世紀前半

２号墳

〈墳　　丘〉　円墳　　直径：約8.5m
〈外部施設〉　外護列石
〈埋葬施設〉　無袖式横穴式石室　　開口方向：南東　全長：約7.0m
玄 室　　長：約4.5m　幅：約0.9～1.3m　高：約1.5m
〈玄室内副葬品〉
土 器 類　須恵器：坏蓋２、坏身７、高坏２、脚坏有蓋短頸壷１、短頸壷１、小壷１、平瓶２、甑３、
土師器：坏１
鉄 製 品　短刀１、鉄鏃８、刀子３
装身具類　耳環４
〈築造時期〉　７世紀初め

３号墳

古墳全体の約2/3が工事範囲外にあり、墳丘は少し削られるものの石室については現状保存する。
〈墳　　丘〉　円墳　　直径：約10m（略測）
〈外部施設〉　外護列石？（入口部分にのみ残存）
〈埋葬施設〉　横穴式石室（袖の有無は不明）　　開口方向：南東
〈築造時期〉　不明

４号墳（第２図）

〈墳　　丘〉　円墳　　直径：約10m
・谷側墳丘内に土留めの石垣をもち、その内側にも内護列石を確認。
〈埋葬施設〉　無袖式横穴式石室　　開口方向：東南東　現存長：6.64m
玄 室　　長：約4.6m　幅：1.1～1.3m　現存高：約1.4m
床：初葬面‥板石敷き　追葬面‥玉砂利敷き

〈玄室内副葬品〉
土 器 類　須恵器：坏蓋１、坏身１、平瓶１
土師器：破片のみ
鉄 製 品　大刀１、刀子１
装身具類　耳環６、勾玉２、小玉14
〈築造時期〉　６世紀後半

６号墳

〈墳　　丘〉　円墳　　直径：約10m
〈埋葬施設〉　片袖式横穴式石室（右片袖）　　開口方向：南東　現存長：約6.1m
玄 室　　長：約3.2m　幅：約1.1m　現存高：約1.2m
床：初葬面‥板石敷き　追葬面‥板石敷き
羨 道　　現存長：約2.9m　幅：約1.1m
〈玄室内副葬品〉
土 器 類　須恵器：坏身４、坏蓋２、甕１
鉄 製 品　大刀１、鉄鏃３、刀子７
装身具類　耳環２、勾玉３、管玉１、切子玉２、小玉16
〈築造時期〉　６世紀後半

７号墳

谷側部分が半分以上失われた状態で検出。石室も右側壁および羨道部を欠く。
〈墳　　丘〉　円墳か　　開口方向：南東　推定直径：約8.0m
・山側に内護列石がまわる。
〈埋葬施設〉　横穴式石室（袖の有無は不明）
玄 室　　現存長：約2.8m　現存幅：約1.0m　現存高：約1.2m
床：角礫敷き
〈玄室内出土遺物〉敷石面下より出土
土 器 類　須恵器：坏蓋１
鉄 製 品　刀子１
〈築造時期〉　７世紀初め

● 竪穴式小石室

１号

長：約1.7m　幅：約0.4m　現存高：約0.4m　出土遺物：土師器甕１

２号

長：約0.9m　幅：約0.4m　現存高：約0.4m　出土遺物：なし

３号

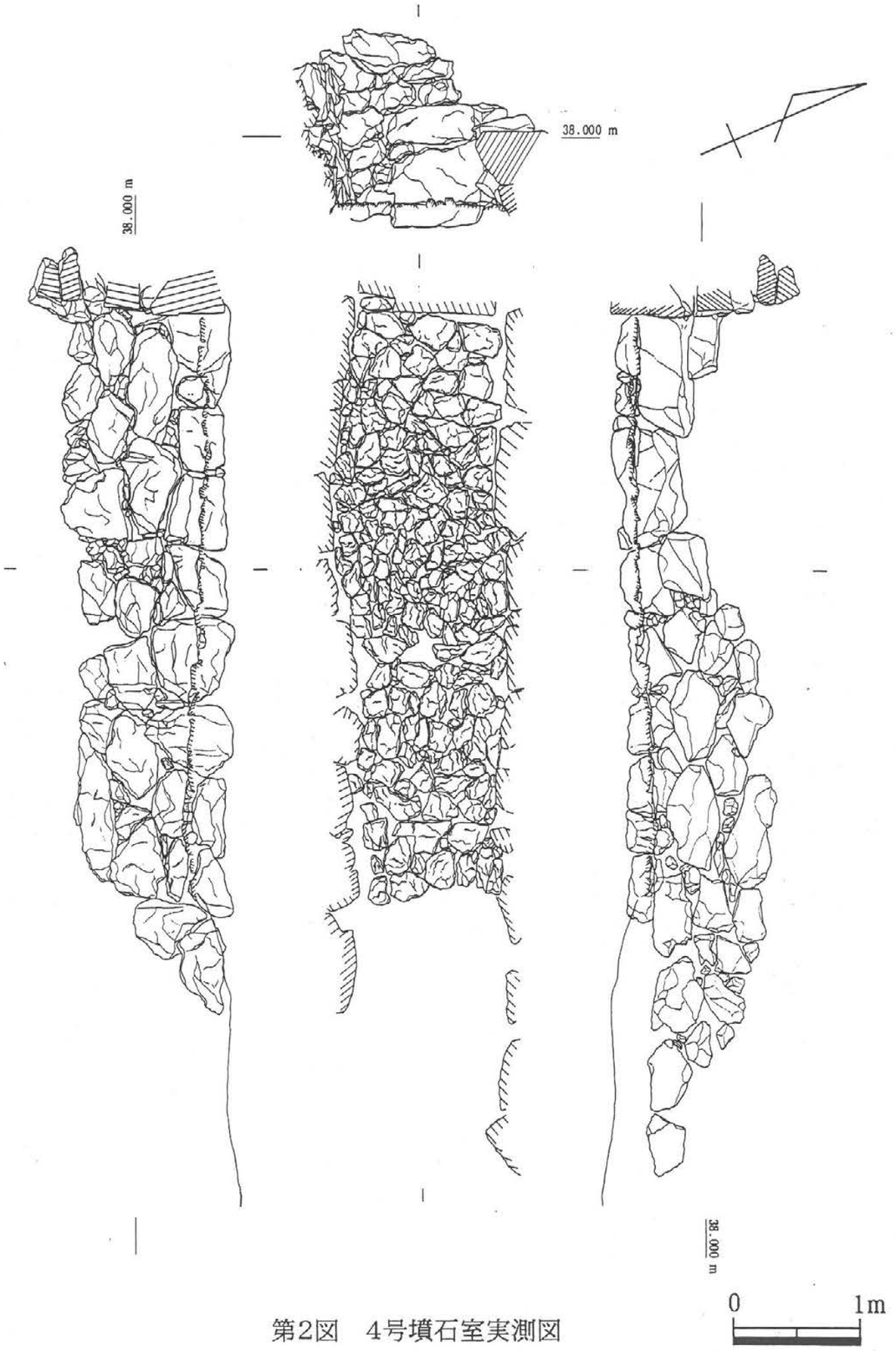
谷側部分が失われた状態で検出。
現存長：約0.6m　幅：0.2～0.3m　現存高：約0.3m　出土遺物：なし

４号

谷側部分が失われた状態で検出。
現存長：約1.2m　現存幅：4.0m　現存高：0.2m　出土遺物：なし

５号

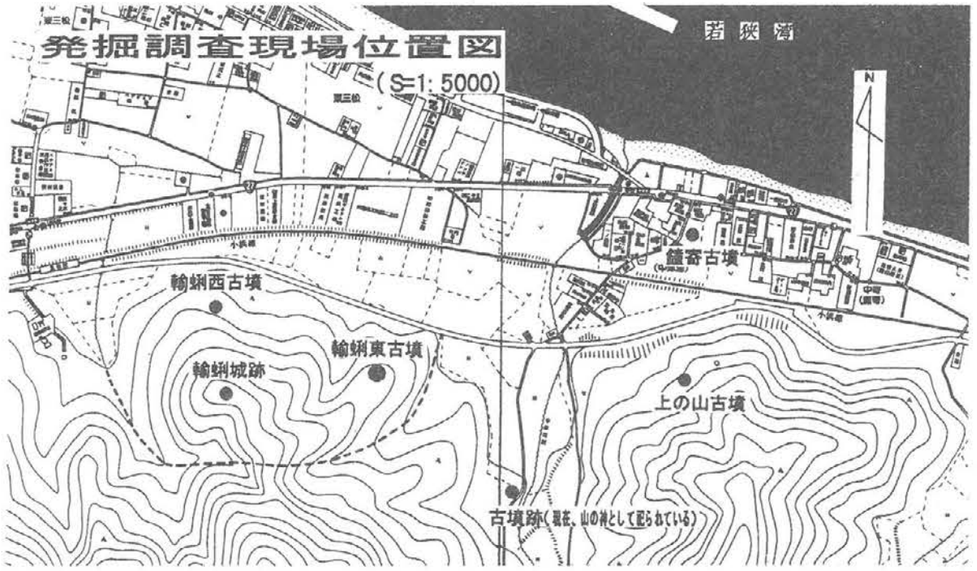
長：1.5m　幅：約0.6m　現存高：約0.6m　出土遺物：土師器壷１



第2図　４号墳石室実測図

輪蜊東古墳

所 在 地　福井県大飯郡高浜町東三松3字輪蜊
調査原因　民間業者の土砂採取事業
調査期間　平成9年11月6日～平成10年3月31日
調査主体　高浜町教育委員会
調査担当　高浜町郷土資料館　安倍義治
時　　代　古墳時代 後期



■周囲の環境

輪蜊東古墳は高浜町のほぼ中央部、ＪＲ東三松駅の東約400mで町道南山手線に接する山稜の尾根上に所在する。青葉山を西に、若狭湾を眼前に臨む位置、標高約60mの高所に築造され、周辺には「上の山古墳」や「鐘寄古墳」等が点在し、北へ約400mで行き当たる海岸線には「中津海遺跡」や「中寄遺跡」等の製塩遺跡も所在する。また、青葉山麓南東台地の小和田一帯には前方後円墳の二子山3号墳、行峠古墳が所在し、これらに続く後期古墳が多く確認されている。なお、本古墳を稜線づたいに西にカーブして登っていくと、標高90mの地点に中世山城跡、そこから北西に向かい降りていくともう1基古墳が所在している。

■調査概要

土取りのため墳丘の西側約1/3程度が既に削られ、残存部分も上部は既に欠失しているが、墳丘南に入れたトレンチでは地山の岩盤まで掘り込んだ周溝を検出した。墳丘の北側は角度がついて落ちていくため裾らしき痕跡は検出できなかった。石室の中心と周溝を墳丘の半径と想定すると、直径約14m弱の円墳であることがわかる。

遺構は長さ約3.5m、幅約2m強の長方形の玄室と、東の谷に向かい開口する長さ約2.5m、幅約1mを計る羨道部から成る（入口から見て）右片袖の横穴式石室を検出した。玄室入口には40～50cm大の割石による閉塞石が下段1列のみ残存していた。天井石は当初見えていた2石と玄室内に落ち込んでいた2石で計4石で構築されていたものと思われる。天井石は大きいもので長径1.5m程度であり、かなり持ち送りの顕著な構造と思える。玄室入口上には楣石が渡されていたが、羨道部には天井石のかけられていた形跡はない。両側壁は殆ど崩壊しており、裏込めの石材が露出している状況であった。両側壁及び奥壁の最下段は70～80cm程の横長の石材を腰石として使用している。壁面は殆ど山石を利用しているが角の取れた川石も使用しており、大きい石の間に小さな角礫を詰めて補強している。玄室の各コーナーは石材を互い違いに組んで構築している。床面は玉砂利敷きで、奥壁から50cm程度の範囲は3～4cm大のものが多く全体的にまとまりがある。そこから2.5mくらいまでは2～cm大の玉砂利がおおくなるが、これに5～10cm大の角・丸礫が混入してくる。さらに玄門へ近づくほど典型的な玉砂利は少なくなり、角礫もまばらに散見する程度となる。

■出土遺物

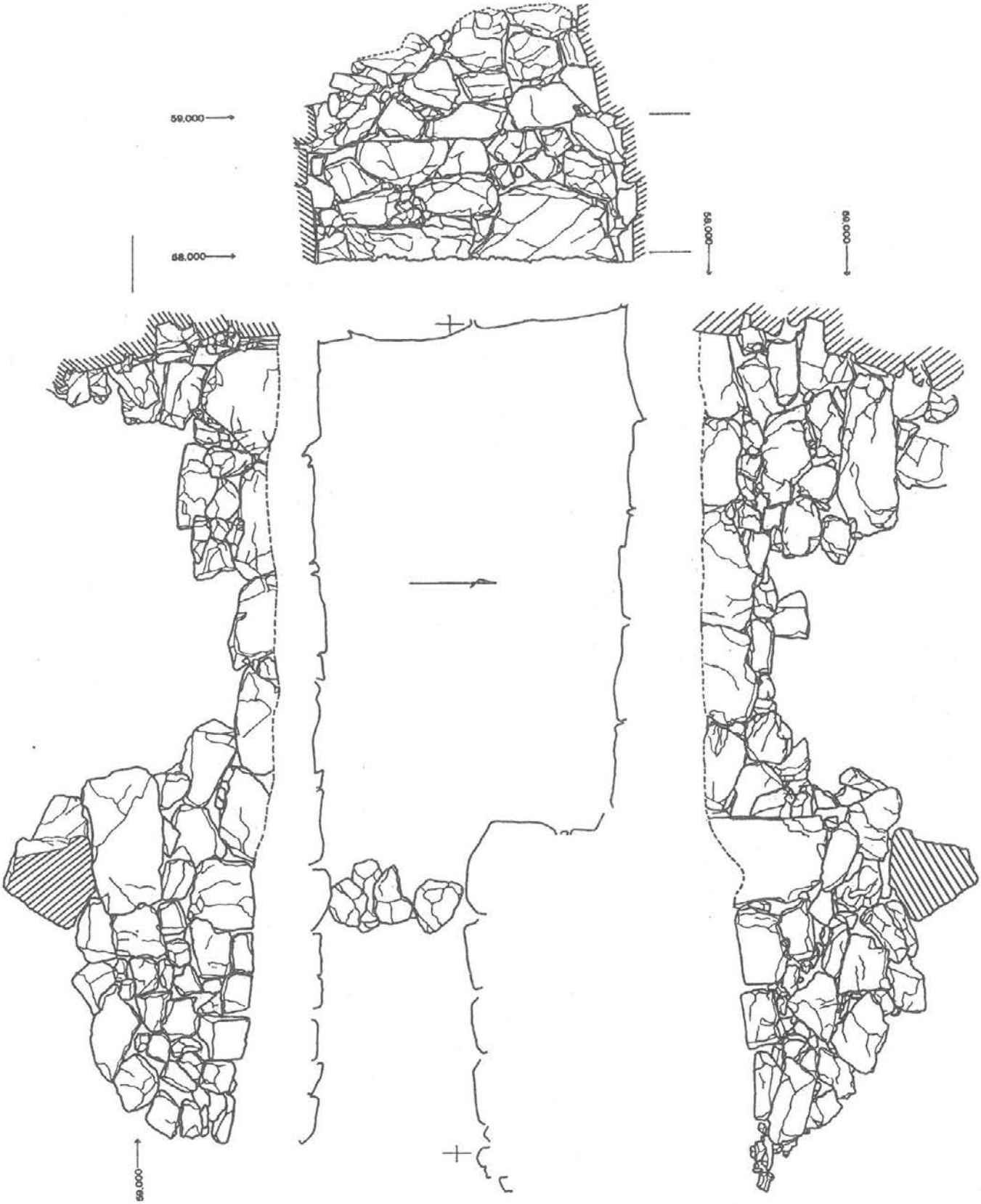
土器類；土師器、須恵器	約	50点
鉄器類；鉄刀、鉄鏃、刀子、鎌、鉄斧	約	40点
装飾品；勾玉、管玉、小玉	約	200点

■ま と め

出土遺物は予想以上に豊富で、特に追葬時に袖部に片づけられた須恵器・土師器は30個を越え、出土土器全体の7割を占めた。整理を進めている段階なので断言できないが、どれも6世紀前半から6世紀末頃の範囲に収まるものと見受けられる。これら須恵器の出土状況に加え、鉄刀が右側壁に沿って2振と左側壁に沿って1振出土していること等から、複数回の追葬が推測できそうである。玉類は勾玉と管玉で20個程度、残りは小玉で全体で約200個出土しているが、玄室の中心よりやや右側壁と奥壁に寄った区域の分布密度が高いようである。また、本古墳では馬具や耳環は出土していないが、高浜町の2基の前方後円墳に比較しても大筋では遜色が無い。被葬者は前方後円墳こそ造り得なかったが、彼らに次ぐ有力者であったと考えられる。

石室の構造であるが、基底に大きめの石材を使用し、その上に小さめの石材を数段積み、持ち送りの始まるあたりに大きめの石材を利用していることや、袖部の石は1石ではないが、かなり高さを意識した使用方法であり、玄室の閉塞に割石を使用している等の事実は二子山3号墳の石室の影響を感じさせ、築造は6世紀半ば頃でないかと考えている。

調査中の感触では盗掘があったようには見受けられなかったが、玄室内で鎌倉時代頃の瓦器片を検出している。また、石室崩壊時に中に落ち込んだと思われる甕、提瓶、横瓶も出土しており、墳頂祭祀が行われていたことを物語っている。



横穴式石室実測図

S =1/40